

韓国のボランティアツーリズムの現状に対する研究  
～発展途上国の貧困問題解決につながる観光をめざして～

正会員 ○Yongwon LEE\*  
正会員 川原 晋\*\*

開発途上国 まちづくり 貧困  
韓国 ボランティアツーリズム

## 1. 研究の背景と目的

開発途上国の経済面から物的環境面、文化面までを含む貧困問題<sup>注1)</sup>を削減するため、国連世界観光機関 UNWTO (United Nations World Tourism Organization)は、STEP (Sustainable Tourism-Eliminating Poverty)財団を設立するなどして、持続可能な観光面から、この問題に取り組んでいる。それは、観光産業は開発途上国の第1の外貨収入の資源であり、さらに観光は地域のコミュニティと経済、社会そして環境の維持に大きな利益を与えるためである (UNEP/UNWTO, 2005)。

UNWTO(2010)によると2000年から2009年までの観光産業の年間増加率はアジアの場合5.7%、アフリカの場合6.2%と、欧州(1.8%)、アメリカ(1.0%)よりはるかに速く増加している。また、世界における観光市場占有率は、2010年から2030年には、アジアが22%から30%に、アフリカは5%から7%に増加すると予想されている。(UNWTO, 2011)

また、学術面でも持続可能な観光に対応する研究が進行中である。それは、持続可能な観光、特に ecotourism、green tourism、volunteer tourism、ethical tourism、cultural tourism、responsible tourism、geo tourism の様々な形で現れ、これに対応する研究が進められている。その中で本研究はボランティアツーリズム (volunteer tourism) の概念に注目した。ボランティアツーリズムは、

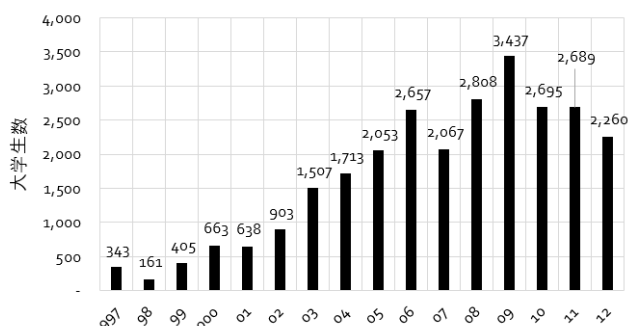


図1. 韓国政府が支援している大学生海外ボランティア活動参加者数<sup>注2)</sup>

地域の環境的側面、社会的側面に直接的に寄与できる形態の旅行で、開発途上国の貧困地域に様々な姿で大きな影響を与えることができるとされている (Wearing, 2001)。

ところで、韓国政府は毎年2000人以上の大学生の「海外短期ボランティア活動」を支援している。これはボラ

ンティア活動を通じて大学生のボランティア活動に対する意識を高め、世界文化の理解及び多様性を学ばせること、また国家イメージを向上させることを目的としている。韓国大学社会ボランティア協議会の2013年の調査<sup>注3)</sup>によると、アンケートに回答した学校(139校)の60.4%が大学の事業として海外ボランティア団を派遣しており、海外ボランティア活動に対する関心が高い。

こうした状況を踏まえ、筆者は、この韓国政府が実施している「海外短期ボランティア活動」プログラムをボランティアツーリズムとして活用すべきと考える。

そこで、本研究では、この「海外短期ボランティア活動」が、ボランティアツーリズムにつながる要素があるかを把握するため、その現状をボランティア活動、ツーリズム、まちづくりの側面から俯瞰することを目的とする。

## 2. 開発途上国の貧困問題解決のためのボランティアツーリズムとまちづくりの必要性

現在、観光を通じた開発途上国の貧困問題の解決において、地域住民に直接影響を及ぼす方法 (図2の下段)が必要だと多くの研究者たちによって議論されている (Jamieson et al, 2004)、(Harrison D, 2008)。これは、開発途上国への支援は、まず、富裕層が経済的利益を得るようになって経済活動が活性化し、富が低所得層に伝わるという考え方 (図2の上段) が実現しないことへの反省からである。(Christie, 2002)

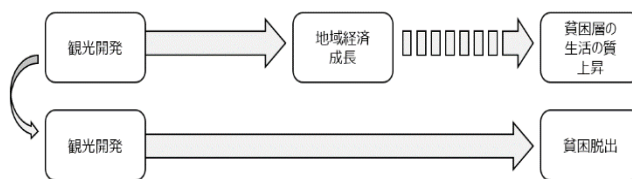


図2. 観光と貧困に対する考え方の変化 (Bowden, 2005)

筆者も、直接貧困層に影響を及ぼせるボトムアップ型の取り組みが必要と考えた。そこで、ボランティアツーリズムと、「住民が主体となって自らの生活環境やコミュニティ改善のために活動を展開するまちづくり<sup>注4)</sup>」の手法を合わせた「新しい観光アプローチ」を提案したい。これは、観光の魅力が不足した開発途上国の貧困地域に人間の感性にアピールするボランティアツーリズムとまちづくり活動を導入することで、現地の人の人間の基本的

欲求を満足して、次第に観光を支えるハード・ソフトの基盤を構築した後に、様々な観光プログラムを通じて地域経済を活性化する、4段階のプロセスである。

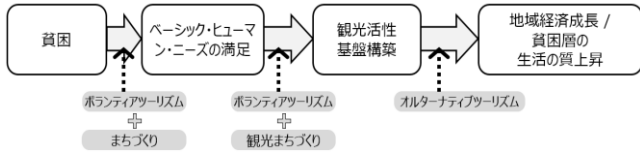


図3. 開発途上国の貧困問題解決のための新しい観光アプローチ

### 3.韓国の大学海外短期ボランティア活動の現状

各国の国際ボランティア活動は、OECD 6カ国<sup>注5)</sup>では政府が直接ボランティア団を派遣している。また日本では、JICAが4種類の海外ボランティア活動を派遣しているが、ツーリズムの要素を持つ活動は、NGOが遂行している。韓国政府の場合は1991年、「韓国国際協力団 (Korea International Cooperation Agency, KOICA)」という名称で国際協力団体を設立し、様々な国際協力プログラムを遂行している。そして2009年ワールド・フレンズ・코리아 (World Friends Korea, WFK) という組織を設立し、国家政府の外交通商部、行政安全部、教育科学技術部、文化体育観光部、知識経済部でそれぞれ担当した海外ボランティアプログラムを総括的に遂行し始めた。WFKは全て7種類の海外ボランティアプログラム (KOICA 海外ボランティア、開発途上国科学技術支援、中長期諮問、退職専門家、大韓民国ITボランティア、韓国大学生海外ボランティア、世界テコンドー平和ボランティア) を実施している。

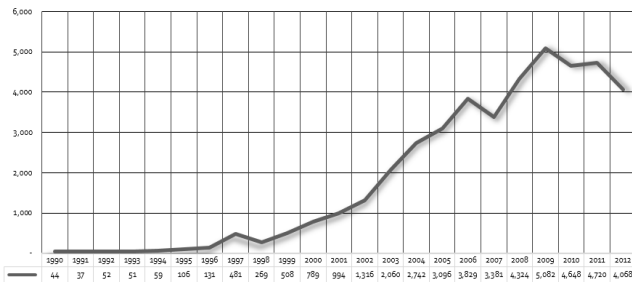


図4. KOICAの海外ボランティア派遣の現状<sup>注2)</sup>

この中で韓国大学社会ボランティア協議会 KUCSS (Korean University Council for Social Service) が大学の休暇期間 (2~3週間) に、海外の貧困地域にボランティアと観光目的の大学生短期海外ボランティアプログラムを遂行している。韓国の大学生短期ボランティア活動は1997年に大学生131人を外国に初めて送り、2009年にはKUCSSがWFKの大学生ボランティア派遣主管業務を担当し、現在まで30カ国に7000人以上の大学生を海外短期ボランティアプログラムで派遣している。

本研究では、政府が推進するボランティアツーリズム

を実施している韓国 KUCSS の海外短期ボランティア活動 (以下 WFK 海短ボ) を取り上げる。その2010年~2013年までに派遣された110チームの全活動プログラムに関する報告書<sup>注6)</sup>を収集し、そのプログラムの種類、実施数を把握した。

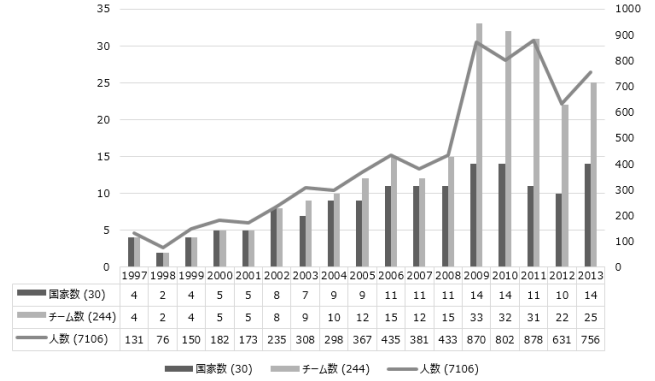


図5. KUCSS海外短期ボランティアプログラムの派遣の現状

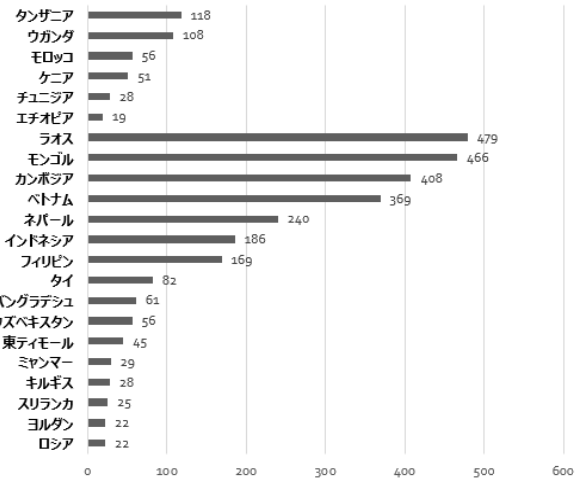


図6. 本研究の奉仕活動プログラムの対象国ごと参加者数

#### 3-1. 活動の内容の類型化

まず、それぞれのプログラムを観光、ボランティア活動、まちづくりのどの内容に近いものなのかを評価し類型化した。110チーム32種類で合計1030の活動を分析した。その結果が図7である。まず、海外 (開発途上国) で、その地域住民たちと交流しながら韓国では経験しにくい地域の文化を体験できる点で、すべての活動を広く観光と捉えた (一番外側の四角)。純粋な観光は、9.1%である。全活動の中で英語教育、職業教育、

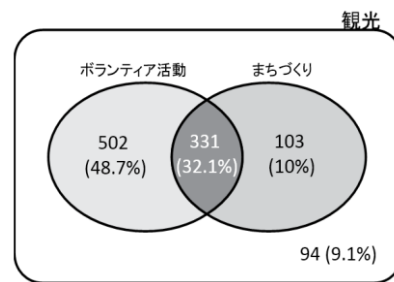


図7. WFK海短ボの活動参加度

くい地域の文化を体験できる点で、すべての活動を広く観光と捉えた (一番外側の四角)。純粋な観光は、9.1%である。全活動の中で英語教育、職業教育、

\*首都大学東京 都市環境科学研究科観光科学域 博士後期課程、修士(都市工学、韓国)、\*\*同 観光科学域 准教授,博士(工学)

\*Doctoral student Dept. of Tourism Science, Tokyo Metropolitan University, M.Urban Eng., \*\*Assoc.Prof., Dr.Eng.

コンピューター教育などはボランティア活動に分類した(17種類、502つの活動、48.7%)。まちづくりに分類した活動は主に地域住民のコミュニティを活性化するプログラムであり、文化交流、体育大会などである(3種類、103つの活動、10%)。そして、観光とボランティア活動、まちづくりにすべて包含されるプログラムとしては、例えば、参加者が地域住民とともに、村の教育施設の改善や、住宅の補修などが含まれる(計11種類、331つの活動、32.1%)。このように、ボランティアツーリズムが住環境改善というまちづくり活動と一緒に実施されていることがわかる。この内容を充実させることが、地域住民が主体となって貧困問題を削減させる活動の基礎になると考えられる。

### 3-2. ボランティア活動が開発途上国に及ぼす影響の視点からの分析

ここでは、UN Volunteers(以下 UNV)<sup>注7)</sup>と World Volunteer Web<sup>注8)</sup>で提示されている「ボランティア活動が開発途上国に及ぼす影響を考察するときの論点と、UNWTOの持続可能な旅行の尺度(UNWTO, 2004)」の3つを参照して、WFK 海短ボのプログラムを評価する指標を設定した。そして、次のように(1)交流活動内容(Social Issue)、(2)現地の人に教えた内容(Human Issue)、(3)物理的環境改善支援面(Physical Issue)、(4)経済的側面(Economical Issue)、(5)地域とのコミュニケーション面の(Political Issue)の5つの項目ごとに整理した。

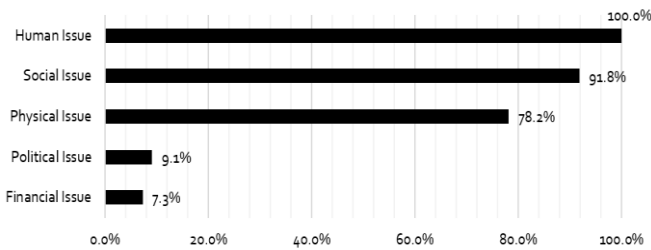


図 8. 本研究の海短ボチームの項目別プログラムの参

#### (1) 交流活動内容 (Social Issue)

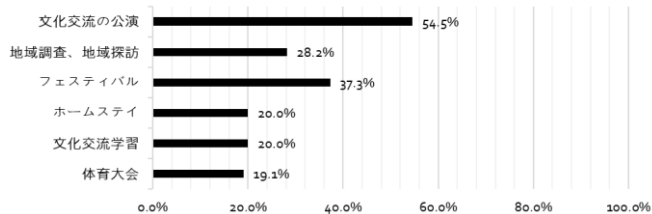


図 9. 本研究の海短ボチームの交流活動内容

UNV によれば、ボランティア活動は社会的活動に貢献

するとしており、例えば、地域住民との広範な交流を通じて地域のコミュニティを強くし、これを土台に自立できる動機を与えるとした。そして、その要素を、信頼をもとにお互いを理解して彼らの求めているものとうまく対応できなければならないと述べた。また、貧困した地域の人々は他の国の文化を接することができる機会が少ないため、このような文化交流は、地域住民たちが自ら自立できる動機付けになるために重要である。WFK 海短ボの場合 91% 以上のチームが地域との交流に向けた活動等を進めた。特に、文化公演や地域の祭りを通じたお互いの文化を交流と、地域施設探訪及び調査、体育大会、ホームステイなどを通じて、地域との関係形成をする活動をした。

#### (2) 現地の人に教える内容 (Human Issue)

UNV はボランティア活動の人間中心面で技術と知識の教育、地域住民の保健を強調している。この教育と保健はミレニアム開発目標(Millennium Development Goals)の8つの目標の中で3つの目標(普遍的初等教育の達成、ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上、HIV/エイズ、マラリアその他疾病の蔓延防止)<sup>注9)</sup>である重要な課題である。WFK 海短ボの場合、全てのチームが地域の教育あるいは健康のためのボランティア活動を進めた。しかし、教育のプログラムが実質的技術よりは簡単な韓国語(45.5%)、韓国の伝統文化(32.7%)、音楽(45.5%)、美術(72.7%)などボランティア中心の教育が多かった。英語(23.6%)、科学(21.8%)、数学(1.8%)及び職業教育(20.0%)は不足している。したがって、地域住民に実質的に役になる教育プログラムの造材が必要だと言える。また、UNV は地域の健康、そして、性に関する教育が必要だと主張した。WFK 海短ボは簡単な衛生教育はしたが、医療事業や性に対する教育はほとんど実施していない。そして、World Volunteer Web では社会的弱者である子供、女性、障害者、老人、HIV/AIDS、無住宅者などを言及したが、

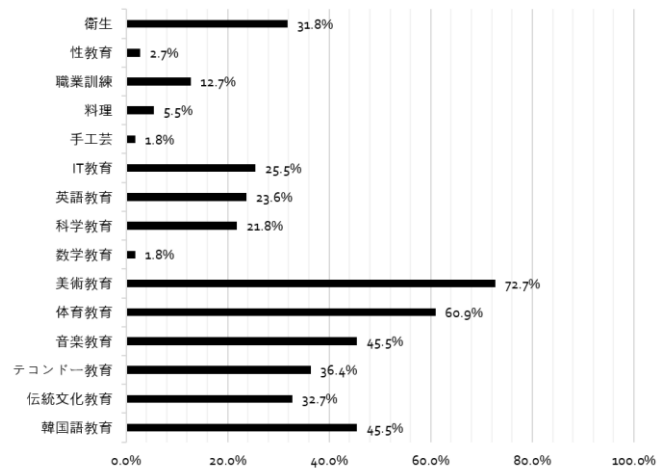


図 10. 本研究の海短ボチームの 現地の人に教えた内容

WFK 海短ボの場合は多くが(89%)の子どもを対象に活動をし、障害者に向けた活動が11%、そして、その他の社会的弱者を対象とする活動はほとんどない状況である。したがって、これらのための配慮が必要であることがわかった。

### (3) 物理的環境改善支援面 (Physical Issue)

地域の学校、上下水道、道路等の基盤施設の改善は政府が解決すべき課題だが、開発途上国では十分な供給が行われない。そのためにボランティア活動者たちが活躍していた。WFK 海短ボの場合86チーム(約78%)が参加した。しかし、69チーム(約62%)が学校施設の改善に集中し、地域の衛生施設や住居環境の改善等はわずかしが行われていない。したがって、大学生ボランティア活動参加者が地域住民と共に彼らの住居環境改善や、地域環境浄化などに寄与する様々な方法を講ずる必要がある。

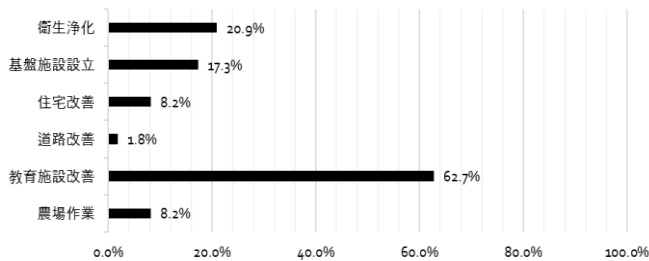


図 11. 本研究の海短ボチームの物理的環境改善支援面内容

### (4) 経済的側面 (Economical Issue)

地域で生産した商品やサービスの取引は地域経済の利益に重要な要素である。WFK 海短ボの110チームは平均一つのチームに28人が15日間地域で滞在しながらボランティア活動を行った。これは、持続可能な観光の最も基本となる概念で、観光客が大規模のホテルやリゾートの代わりに貧困した地域住民の家にとどまり、地域住民の飲食店で食事をしながら直接彼らに価格を支払って彼らの経済に利益を与えることである。そして、宿泊と食事、生活に必要な費用は地域貧困住民に直接的な影響を与えた。また、ボランティア活動をしながら韓国からの寄付金も経済的利益をもたらした。また、8チームが韓国から持ち去った物品をもとにフリー・マーケットを開いて、韓国の物品を安い価格に地域住民に提供した。そしてその利益金は再び地域住民らとパーティーをしたり、寄付をしたりして、地域住民らに返した。したがって、大規模の経済的効果はないが直接的に地域住民の経済的利益の面では寄与した。

### (5) 地域とのコミュニケーション面 (Political Issue)

海外ボランティア者のプログラム進行においてその地域の行政と住民との意思決定が重要である。WFK 海短ボの場合参加する大学は地域 NGO と一緒に協力をしながら

KOICA の地域事務所と連携をして、その地域 NGO と KOICA が地域住民の要求や行政との関係を連結してくれる役割をしている。また、9%は、市長等と会って住民の意見を伝えた。

## 4.まとめ

本研究では韓国の WFK 海短ボプログラムの現状を開発途上国に及ぼす5つ影響の視点からとらえた。その結果、「(1)交流活動」や、学校と村の環境改善などの「(3)物理的環境改善支援面」や、学生ボランティアが数日飲食や宿泊をすることによる「(4)経済的側面」での短期的な利益については、地域に貢献していることがわかった。しかし、WFK 海短ボボランティア活動の110チームが全プログラムに入っている「(2)現地の人に教える活動」は、英語教育、科学教育、IT教育と職業訓練などであり、貧困者の利益につながるプログラムや教育は非常に少ないということがわかった。これは地域住民が何が必要かではなく、ボランティア活動の参加者が教えられるプログラムであることが優先されているからと考えられる。

したがって、貧困問題解決を目標にしてこれを向けたボランティアツーリズムのプログラムを構築するには、地域住民が必要とするプログラムとなるように改善する必要があると考える。そうすれば、WFK 海短ボは、図3で提案するボランティアツーリズムの最初の段階に貢献できるプログラムになると考える。

(注)

- 注1) DAC 貧困削減ガイドラインは、「貧困とは、異なる社会や地域の枠組みの中で、人間にとって最も重要な要素（経済的、人的、政治的、社会・文化的、保護能力）が剥奪され、それらの要素に対応する能力が欠如している状態」と定義した。（JICA, 2013）
- 注2) KOICA の資料を筆者が整理
- 注3) 韓国大学社会奉仕協議会(2013)2013年、大学開発海外ボランティアプログラム支援事業、海外ボランティア業務担当者、下半期の教育、懇談会資料
- 注4) 日本建築学会(2004)まちづくり教科書第1巻 まちづくり方法
- 注5) 韓国、米国、ドイツ、ルクセンブルク、日本、ベルギー
- 注6) KCUSS の[韓国大学生海外ボランティア団]資料の活用(2009~2013)
- 注7) UN Volunteers (2011) State of the World's Volunteerism Report
- 注8) <http://www.worldvolunteerweb.org/>
- 注9) <http://www.un.org/millenniumgoals/>

(参考文献)

- Bowden, J. (2005) Pro-poor tourism and the Chinese experience. *Asia Pacific Journals of Tourism research* 10(4), 379-398
- Christie, I.T. (2002) Tourism, growth and poverty: Framework conditions for tourism in developing countries. *Tourism Review* 57(1/4), 35-41
- Jamieson Walter, (2004) Harold Goodwin & Christopher Edmunds Contribution of Tourism to Poverty Alleviation, Pro-poor Tourism & the Challenge of Measuring Impacts, UN ESCAP: Transport & Tourism Division. From <http://www.haroldgoodwin.info> (retrieved December 29, 2011)
- Harrison D (2008) Pro-poor Tourism: a critique *Third World Quarterly* 29 (5) 851-868 .
- UNWTO, (2004) Indicators of Sustainable Development for Tourism Destinations
- UNWTO, (2010) UNWTO Tourism Highlights 2010 Edition
- UNWTO, (2011) Tourism Towards 2030 Global Overview
- UNEP/UNWTO, (2005) Making Tourism more Sustainable - A guide for policy makers.
- Wearing, S. (2001) *Volunteer Tourism: Experiences That Make Difference*. CAB International, Wallingford

\*首都大学東京 都市環境科学研究科観光科学域 博士後期課程、修士(都市工学、韓国)、\*\*同 観光科学域 准教授、博士(工学)

\*Doctoral student Dept. of Tourism Science, Tokyo Metropolitan University, M.Urban Eng., \*\*Assoc.Prof., Dr.Eng.